



気象学と間違われやすいのですが、「気候学」とは気象現象が長年の間に私たちの生活にどんな影響を及ぼしているのかを探る学問です。この二つの科目は地球をとりまく大気の大現象を相手にしているという点では同じですが、気候学は刻々と変化する現象ではなく、何十年、時には何百年という単位で蓄積された気象データや指標をベースに考えていきます。また観測地域をある程度限定し、気候の特色を研究していきます。

たとえば、私の場合はアメリカに10年近く滞在し、北アメリカやハワイ諸島の気候とそのメカニズムを調査研究してきました。講義でもハワイの slides を豊富に使用しますが、その理由として

ハワイ諸島では、熱帯からツンドラまでの気候がモデルケース的に研究できるからです。

授業の前半では日本の季節ごとの気候の特徴を、後半では気候変動と地球温暖化、エルニーニョ現象なども解説していきます。また、天気図や気象衛星、資源探査衛星などからのデータなども使用しますが、国士館大学の「地理情報処理室」は最新のパソコン、ワークステーションが完備しており、学生諸君がこれらを自由に使って調査研究できるのも大きな特長です。

こうした研究をとおして大切なのは気候と人間の関わりを常に考えること。地球上には実に様々な人間の生活があります。その暮らしが、住む地域によってなぜこんなにも違うのか、ということをより深く考えることだと思います。気候学はそのための有効な手がかりとなります。ですからこの学問を学ぼうとする人にはぜひ、旅をしてほしい。そこから生まれる驚きや、好奇心を大切にしてほしい。まったく未知の土地をひとり旅したい人、好奇心を揺さぶるような旅をしたい人などには、ぜひ学んでほしい学問といえます。

また、このほかの担当科目では、北アメリカの地誌の他、自然地理学の概論、環境問題なども講義しています。

Student's Voice

最近の天気状況から、長年にわたる気候の変化まで幅広く学びます。特に最近の天気に関しては、気象衛星「ひまわり」の写真から大気の移動についての細かい解説があり、なぜ雨が降るのかという初歩的なことも学ぶことができます。データや指標をベースにする学問だけに、野口先生が毎回配布してくれるレジュメがすごく重要になります。先生は天気についてお話するのが本当に好きで、時には熱中するあまり授業時間をオーバーしてしまうことも。中身の濃い講義にだけに、こちらも自然と熱が入ります。(中村美智子 ● 文学部・地理学専攻3年/群馬県立沼田女子高校出身)

